

上月行敬筆『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋賑之図』について：鹿児島大学附属図書館本と鹿児島県立図書館本のあいだ

丹羽，謙治

<https://doi.org/10.15017/4742055>

出版情報：雅俗. 16, pp.61-76, 2017-07-20. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



上月行敬筆『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋賑之図』について

— 鹿児島大学附属図書館本と鹿児島県立図書館本のあいだ —

丹羽 謙治

一

鹿児島大学附属図書館に『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋賑之図』という、嘉永三年（一八五〇）の琉球謝恩使を描いた二巻の絵巻が所蔵されている。「玉里文庫・番外」として登録されているので玉里島津家の旧蔵にかかるものごとく思われるが、その根拠はなく伝来は不明である。本絵巻については、現在まで幾度か紹介されている⁽¹⁾が、いまだ作者や成立について詳細な分析がなされていない憾みがあった。本稿はその伝来を中心に、絵図にまつわる問題点を可能な限り明らかにし、絵図の活用に向けての土台を作ることを目的とする。

本稿で扱うのは鹿児島大学附属図書館本と鹿児島県立図書館本の二種の彩色写本であるが、まず前者の概要を記しておく。

『琉球人行粧之図』 卷子本一卷 十五・四糎×九百二十四糎

『琉球人往来筋賑之図』 卷子本一卷 十五・四糎×五百六十九糎

(図11A)

この資料がいつ鹿児島大学附属図書館の所蔵に帰したのかは不明である。現在は卷子本の形態をとっているが、もとは一枚ずつばらばらの状態であった⁽²⁾。平成元年に、鹿児島市内の表具店に依頼して巻物

二巻に仕立てられたことがわかつている⁽³⁾。

絵巻の作者および製作目的については、『賑之図』の末にある跋文から明らかである。煩をいとわず、左に全文を紹介する（引用に際し、句読点を補った。また、左訓は（ ）に入れて本文の中に組み込んだ）。

跋

予東都の客舎にありて此巻くを圖すること其意もとづく所なきにあらす。そは予が外祖父栗野盛友翁天性繪画のみに敏く、切磋の功をからずして此道を能し、人物、花鳥、山水、奇石、見るにしたかひ是を圖するに、其真状を得ずといふことなく、曾て東都に旅客たるの日、君公官家の命をかうふり給ひて浅草の積倉非常の警衛を司り給ふ。是によつて火防守備隊行の趣を摸し、幼稚の者にしらしめんと二巻となす。予其巻を拝するに、先火事場方角遥二火の手を顕し、次二立場御人数操出しの圖をのせ、尤簾高挑灯等迄弁せんが為に、昼夜を一時二記し、或ハ鉤鉄（とびのもの）を杖、前を追ふの歩卒あり。或ハ矛を擔ひ、或ハ轡を執るの雜卒二至るまで、行伍のさま悉く洩す事なふして飽二期なし。是予幼稚の時にして初て藩邸（おやしき）の旗號と部伍との趣を知るを得たり。此中山使聘禮之圖ハ右二類する事ならねど、

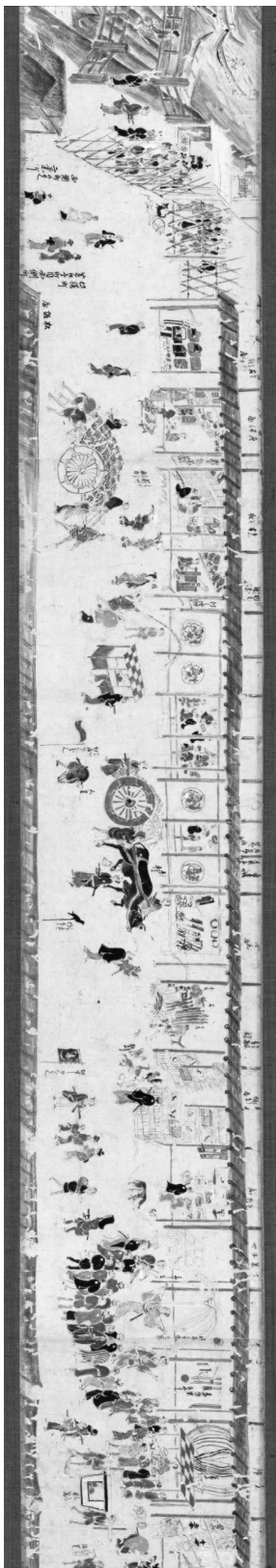


図1-A 『琉球人往来筋脈之図』 芝ロ一丁目の街並（部分、鹿児島大学附属図書館蔵）

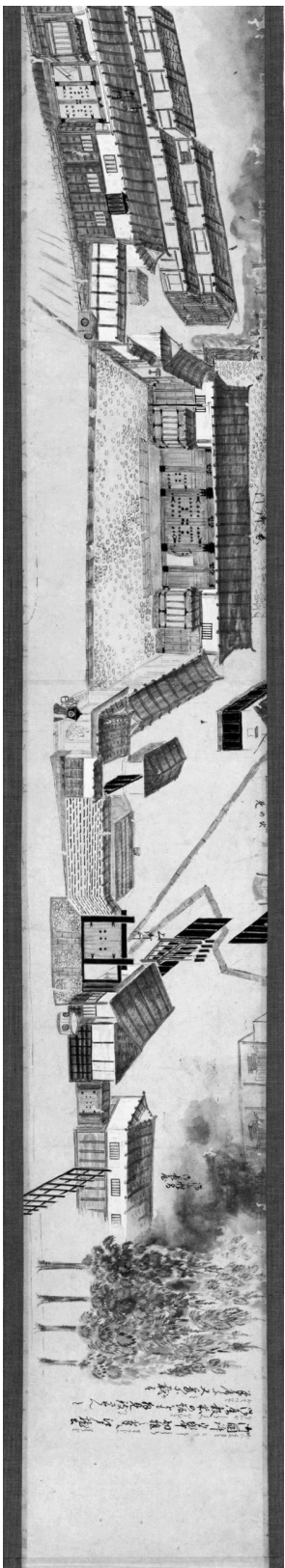


図1-B 『琉球人往来筋脈之図』 麻布龍土の宇和島藩上屋敷（部分、鹿児島大学附属図書館蔵）

予亦邊土の幼稚二粗都會（えと）の形状（ありさま）をもしらしめんと、虎を画狗に類するの嘲（あざわら）をもいとわす、祖父か情（しやう）にもとつきて、かくハ筆を執（と）るものならし

上月行敬記ス

この跋文で、上月行敬は、外祖父栗野盛友が江戸浅草御蔵の火の番に従事した際、得意の画技を使って火消しの絵巻二巻を作成したのに倣って、自身の江戸勤番の際に目にした琉球人参府の模様を描いて故郷の子どもたちに残そうとしたことを伝えている。「中山使聘禮之圖」を書名としていたことがわかるが、注目されるのは跋文の前に描かれた武家屋敷の門である（図1-B）。これは、琉球使節の通行筋にあるものではなく、実は本絵巻の作者が仕える大名家の屋敷であった。

豊橋市二川宿本陣資料館『琉球使節展』図録⁴の「琉球人往来筋賑之図」解説を次に引く（傍線は引用者）。

使節の行列を描いた「琉球人行粧之図」と二巻で一組である。江戸城へ向かう使節が通った後の江戸芝口一丁目（新橋駅）付近の賑わい、道筋である幸橋見附、白河藩主阿部播磨守の屋敷などを描いている。本資料には大正期の写本があり、棧敷で見物する人々の様子が描かれる巻もあるが、本資料では欠落している。跋文で作者は、江戸の状況を国許の子弟に知らせるために描いたという。上巻の「参府年歴」から一八五〇（嘉永三）年ごろ描かれたものと考えられる。

右の文の傍線部は、絵巻中に「阿部播磨守御中屋敷／御上屋敷山下御門内／拾万石奥州白川城主」とあるのに依ったのであろう。ところが、この「阿部播磨守」云々という記述は、その書き入れの右側に描

かれてある屋敷に付された説明ではなく、当該屋敷の隣に「阿部播磨守御中屋敷」があることを示している。すなわち、絵巻は「阿部播磨守御中屋敷」の隣にある宇和島伊達家（十万石）の上屋敷を描いていたのである。

この屋敷について、筆者上月行敬は「龍土邊」の様子を書き留めておいたと書いている⁵。「龍土」とは麻布龍土町一帯（現在の港区六本木七丁目）を指していることは明らかである。改めて絵巻作成当時の龍土町付近の様子を確認しておこう。町人地（龍土町）の周囲をいくつかの武家屋敷が取り囲んでいる。嘉永四年（一八五二）刊の尾張屋版「麻布絵図」でこれらを確認してみる（図2）。

- (1) 松平大膳大夫（長門萩）下屋敷
 - (2) 鍋島甲斐守（肥前鹿島）上屋敷
 - (3) 伊達遠江守（伊予宇和島）上屋敷
 - (4) 阿部播磨守（陸奥白河）下屋敷
- (1)は、いわゆる長州藩毛利家の下屋敷、通称「檜木屋敷」と呼ばれる。明治維新後、陸軍用地となり、戦後は防衛庁（現、防

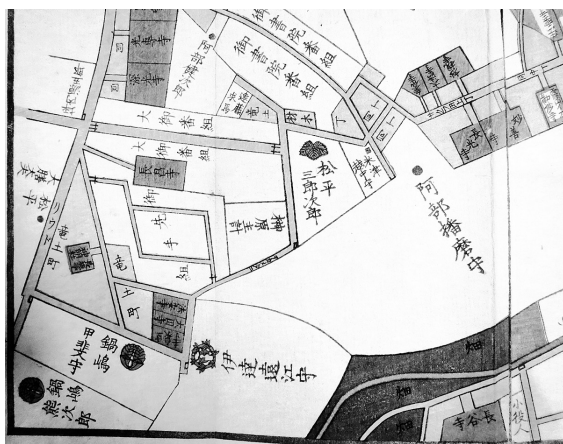


図2 尾張屋版「麻布絵図」（丹羽蔵）

衛省)の施設が置かれたが、市ヶ谷に移転後、再開発され現在に至る(東京ミッドタウン)。

(2)は、佐賀藩の支藩(五万二千石余)の上屋敷。現在の六本木六丁目の交差点を頂点する二等辺三角形を成す麻布龍土町の一边と接している。

(3)は、宇和島藩伊達家十萬石の上屋敷で、表門は龍土町と接しているが、立泉寺、大円寺、法安寺という三つの寺院と向き合っている。現在は政策研究大学院大学と新国立美術館となっている。

(4)は、白河藩阿部家十萬石の下屋敷。表門は龍土町ではなく龍土材木町と接している。

ここで絵巻に描かれた門(向かって右から車門、上御門、表御門、下の御門)およびその前の道に着目してみよう。上御門は通用門であろうか、簡素な造りである。表御門の右手には辻番所が見え、表御門の左側に白壁をおいて下の御門が続く。さらに、その左で直角に折れ曲がって奥へと続いている。また表御門の左手辺りから下り坂になっていることが見て取れる。そうした地形を持つ屋敷という条件に合致するという点でも、伊達家の上屋敷で間違いないであろう。子細に武家屋敷の門を見れば、伊達家の竹に雀の紋をあしらった金具や、門前の桶や番所前の行灯に描かれた豎三引両紋など、随所に宇和島藩邸であることを示す印が書き込まれていたのであった。前掲の「麻布絵図」には伊達家の門脇に番所の印があるが、この辻番所の姿は絵巻にも写し取られているのである⁽⁶⁾。

ここまで、絵巻に描かれた屋敷が麻布にあった宇和島藩の上屋敷であることを述べた。それは言うまでもなく作者の上月行敬が宇和島藩

士であることを示唆する。

従来、右の絵巻の作者は薩摩藩士で、琉球使節の江戸での行列の模様や江戸市中の賑わいを故郷に伝えるために作成したと考える向きが多かった。琉球使節の江戸上りを引率したのが薩摩藩主であり、使節が將軍の拝謁を行う江戸城の様子を描いた後、武家屋敷が描かれているのを見れば、これが薩摩屋敷と思うのも仕方のないことかもしれない。また絵巻という形態も詳細な分析を阻んでいたと思われる。論者もこれまで漠然と上月が薩摩藩士であると認識していた一人である。ただ、作者については若干の異和を感じていたのも事実である。ただ、それは薩摩(特に鹿児島城下)に存在しない「上月」という名に引かかるものを感じるといふ程度のものに過ぎなかった。平成二十七年の冬、富士ゼロックス株式会社の社会貢献事業として、附属図書館にある貴重書数点の複製を作成する事業が提案され、十か月の短期間で精巧な複製が作成された。複製は平成二十八年九月、鹿児島大学附属図書館貴重書公開「玉里文庫善本展」で二巻とも全面展示された。この複製の作成、公開をきっかけとして、論者にとって初めて絵巻に向き合うことが可能になったのである。

二

絵巻が宇和島藩士の手になるものであることが明らかになった。それでは上月行敬とはどのような人物なのだろうか。

先述の絵巻の跋文から、上月氏、栗野氏とともに宇和島藩の中級以上の藩士であることが予想された。宇和島藩士に関する基礎資料とし

ては「家中由緒書」⁽⁷⁾があり、これは宇和島伊達文化保存会のホームページでも画像が公開されている。その後、幸いにも子孫の方と連絡をとることができ、上月家所蔵の文書により、上月行敬についてより詳細な事実が明らかになった。

上月氏は村上源氏の赤松氏の末裔で播州佐用郡上月城主を先祖に持つという。宇和島上月家の初代は新五兵衛、そこに正徳三年（一七一三）越後国村松の堀丹後守直利に仕える高橋半平正長の二男を養子に迎えた。これが、二代目行親で、以下、行登―行充―行宣―行敬……と続く。上月家は文政元年（一八一八）の「分限帳」⁽⁸⁾によると「高百五拾五石九斗六升」である。

上月家には複数の系図ないしはその草稿が所蔵されているが、以下、天保四年（一八三三）に作られた簡略な系図を中心に、適宜他の系図で補いながら上月家の人々を紹介する。「」は朱書を、括弧内は引用者の注記で、上月行敬を中心とした続柄を示している。

（父）「当已六十三歳」

上月新五兵衛行宣^{ウツ} 小名巖

実味木十郎右衛門勝美二男

天明元辛丑十一月五日末期二付為家督百

五拾五石九斗六升頂戴兄小姓相勤其後

御小姓勤其後物頭役相勤ル

御兵具方御腰物方兼帯

天保三壬辰十二月二日依願隠居 号^ニ履中^一

在勤五十二ヶ年

（母）「当五十六歳」

室 シゲ 伊達遠江守家臣 栗野豊後盛友女

（本人）「当已三十八歳」

上月新五兵衛行敬^{ウツ} 小名巖 右衛門治郎 蘭左衛門

天保三壬辰十二月二日家督無相違頂戴

（妻）「二十七歳」

室 ヒサ 大内六左衛門義方女

（妹弟の項目を中略）

（男）「三歳」

上月岩藏

天保四年癸巳六月写之

行敬の父は味木家からの養子であること、母は栗野豊後盛友の娘であることが確認できる。行敬が家督を譲られた翌年に作成されたため、本人の事績の記載がないので、もう一つの系図から、上月行敬の項目を引用する。

上月新五兵衛行敬 小名巖 虎治 右衛門治郎

其後蘭左衛門

天保三壬辰十二月二日家督相續

嘉永六年癸丑正月十二日御長柄頭

安政四丁巳五月廿七日御取次役

安政六己未七月七日依願隠居

名園夫

萬延二年辛酉正月十七日病死行年

六拾六歳

梅岳院實譽檀園居士

上月家の系図と「家中由緒書」から上月行敬の履歴をまとめると次のようになる。

天保十年五月朔日 御広敷番頭役

天保十一年□月二十五日 御広敷番頭役御免

弘化四年九月二日 稲留流炮術指南方

嘉永五年二月二十二日 御城番役 兵具方・御腰物方兼帶

本稿で取り上げている絵巻の成立年次は、嘉永四年（一八五二）と考えられる⁽⁹⁾が、「家中由緒書 弘化四年」⁽¹⁰⁾からは江戸詰であった事実を確認することができない。「家中由緒書」自体が、それぞれの家の当主の業績を網羅的に記述していないという資料の性格に留意する必要がある。

一方、栗野家であるが、宇和島藩の藩祖秀宗が徳川家に人質になった際、父伊達政宗が付けた譜代の家臣の家である⁽¹¹⁾。上月行敬の外祖父、栗野四郎左衛門（後に豊後）の経歴は次の通りである⁽¹²⁾。

安永二年六月二十日 江戸詰を仰せ付けられる

安永八年正月二十二日 留守詰を仰せ付けられる

天明元年□月二十二日^(正) 新席を仰せ付けられ豊後と改名

文化四年十一月二日 退隠

文化七年七月二十九日 死去

「記録書抜 村候公御代」⁽¹³⁾によれば、藩主伊達村候は安永元年（一七七二）五月、安永九年（一七八〇）、天明六年（一七八六）、寛政元年（一七八九）、寛政六年（一二九四）に「浅草御蔵火之御番」を拝命している⁽¹⁴⁾。盛友は「家中由緒書」によれば安永二年から江戸詰になったことが分かっているが、火の番拜命が前年であることを考える

とこの年に担当したとは考えにくい。安永九年、天明六年、寛政六年のうちのいずれかであろうが、由緒書に「留守詰」とあることを考えると、安永九年の可能性が最も高いと考えられる。前掲「家中由緒書」の安永八年と安永九年の記述は次の通りである（読点は引用者）。

一 安永八年亥正月廿二日、御留守詰被仰付、御発駕前元□候様被仰付之事、

一 安永九年子三月四日、御厳略二付、倅造酒哉被下置候御扶持方差上度旨承届之事、

目下、栗野盛友の「火防守備隊行の趣」を描いたという絵巻の現物は確認できていないが、江戸の見聞や情報を故郷の子や孫に絵巻の形で残そうという心意気は孫に伝えられ琉球使節の絵図が残されることになったのである。

三

鹿児島県立図書館には、大正四年九月から十一月にかけて写された「琉球人行粧序」「琉球人行粧」「琉球人往来筋脈之図」という三巻の絵図が所蔵されている。一巻目は「琉球人行粧巻序」と墨書された桐箱に入っており、二巻目は同様に「琉球人行粧之図」、三巻目は「琉球人往来筋脈之図」と題する桐箱に入る。それぞれの巻末には、

「大正四年九月十一日 新納栄写／當年九才」

「大正四年九月／九才児 新納 栄／写」**（図3）**

「大正四年十一月 九才 新納 栄 写」

と奥書があり、九歳の新納栄なる人物によって写されたこと、受入印

から、この絵巻が大正四年十一月九日に購求されたことがわかる。一体、この人物は何者なのだろうか。九歳でこの長大な絵巻を本当に写せたのだろうか。

新納栄の履歴は、全国滋賀県人会連合会発行の『全滋連』38号に記載されている⁽¹⁵⁾。同号の表紙画に新納の「群鶴図」が使用されたことに因る。左にこれを引用する⁽¹⁶⁾。

【経歴】

- 一九〇七（明治四十） 鹿児島市に生まれる
- 一九二九（昭和四） 東京美術学校（現東京芸術大学）日本画科卒業
- 卒業制作同校にて買上げ永久保存
- 帝国美術院第11回展覧会に入選
- 滋賀県立日野高等女学校（美術・書道）
- 一九三〇（昭和五）
- 一九三三（昭和八）
- 一九四一（昭和十六） 横浜フェリス女学院（美術・書道）
- 一九四五（昭和二十） 滋賀県立日野高等学校（美術・書道）

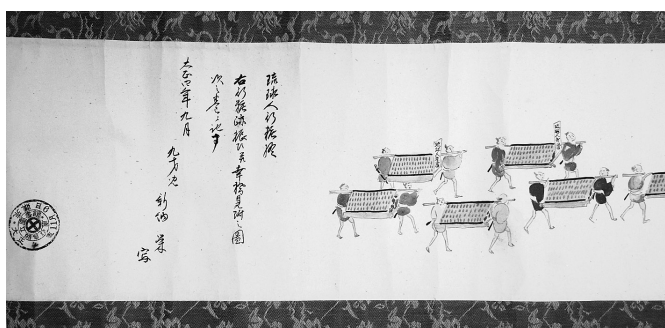


図3 新納栄写『琉球人行粧之図』末尾（鹿児島県立図書館蔵）

一九六四（昭和三十） 同校退任

一九六八（昭和四十三） 東京攻玉社学園（美術）

以降 東京日本画院展覧会にて度々入選
滋賀県日野町わたむきホール虹にて個展製作中の作品を仕上げるため健康回復を祈念するも、一部未完成で遺作展となる。（同遺作「牡丹」は日野高等学校に寄贈）茨城県牛久市にて死去

一九九五（平成七）

新納栄の長男に当たる新納桂氏（埼玉県越谷市住）の許に、栄が伯父新納時守（後述）からもらった系図の写しが残る。これによれば、栄は明治四十年三月五日、鹿児島市新照院町で生まれた。新照院町は鹿児島市の中央に横たわる城山の南西麓に位置し、城山との間にJR日豊本線が走っており、南には甲突川を臨む。ここには後述のように栄の母の実家があり、母親は実家に帰って出産したものと推測する。東京美術学校日本画科に入るほどであるから、小学生の頃から才能を発揮して絵巻三巻を模写したのであると一応の説明がつくものの、満八歳六か月の少年が上月行敬描く絵巻を模写することができたのはなぜだろうか。宇和島の上月氏にある絵はどのようにして鹿児島にもたらされたのか。模写を勧めた、あるいは仲介したのは誰なのか。また、それは何のために写され、どのような経緯で鹿児島県立図書館に所蔵されたのか——疑問は次々と沸き起こってくる。

それらの疑問を解く手始めに、新納家の家系を遡ってみることにしよう。栄の父時哉は初名宗助、元治元年（一八六四）六月十一日生まれ。家は鹿児島城下池之上町二十二番戸（現在の鹿児島市池之上町九

番地、稲荷川に面する土地)で、『旧薩藩御城下絵図』(鹿児島県立図書館蔵)では「新納休蔵／貳百壹坪」とある所である。休蔵は栄の祖父に当たる時叙である。時哉は明治四年二月十五日に新納九兵衛¹⁷⁾の跡を相続、同二十三年四月に児玉宗之丞実則の三女、富と結婚する。富はすなわち新納栄の母親である。以下に時哉の履歴を年表風に書き出してみる¹⁸⁾。

(年次不明)

師範学校(鹿児島師範学校か)卒業。

明治二十三年五月六日

沖縄県師範学校勤務のため富とともに鹿児島を出発¹⁹⁾。(*)

明治二十六年

尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校
図画科の教員免許状取得²⁰⁾。(*)

明治三十一年十一月

『多級複式教授法』(小那覇朝親発行)を出版。肩書は「沖縄県師範学校訓導兼助教諭」(*)

明治三十五年

鹿児島県熊毛郡視学²¹⁾。(*)

清国直隸師範学堂に教習として招かれ、
図画と博物を教授する²²⁾。

明治三十九年

清国保定師範学堂へ赴任。

明治四十年三月五日

次男栄、鹿児島市新照院町で生まれる。

大正六年二月

『神州根本教育 理想統一訓』(教育統一
会刊)を「新納楽山」の名で刊行。住所は
「東京市下谷區茅町一丁目一番地」(*)

大正十三年八月

奏任官待遇(少年保護士事務局嘱託)となる。

昭和三年一月二日

病氣を理由に辞職を願ひ出る²³⁾。(*)

同年三月一日

従七位に叙される²⁴⁾。

同年八月八日

鹿児島県熊毛郡下屋久村中橋瀬で死去。

六十五歳。

新納時哉と富との結婚の前後の模様は、『児玉宗之丞日記』²⁵⁾に詳しく書かれている。これによると明治二十三年四月十三日の早朝、宗之丞は「新納時哉殿ヨリ富ヲ貰ひ受度旨申来候付き、則ヨリ全宅検査并近所邊へ聞併旁ニ差越」した。

児玉家は江戸時代、深見玄岱に師事した児玉金鱗(宗因)、室鳩巢に師事した図南(金鱗息)といった学者を輩出した家であった。当主宗之丞は郡役所の書記を務める。時哉が富を結婚相手に選んだ理由などは不明だが、宗之丞がわざわざ聞き合せに赴いているところを見ると両家が親戚関係にあったとは考えにくいので、新納家が右のような児玉家の性格や家格を考慮してのものかと推測する。

沖縄県師範学校時代の明治二十六年には「文部大臣ヨリノ免許状相達」²⁶⁾した。当面の関心からいうと、免許の科目が「図画」である点は注意すべきである。その後、時哉は雑誌『琉球教育』にさかんに教育に関する論考を発表しているが、それらはほとんど教授法に関するものであり、後にまとめて『多級複式教授法』として出版された。その後、一時、熊毛郡視学として屋久島に渡ったが、明治三十五年、当時清国が中国人では教授できない「西学」(理科、法政、図画、体育、音楽など)を、日本人を招聘して担当させており²⁷⁾、時哉も招きに応じて袁世凱が建てた直隸省師範学堂で図画と博物を教授した。

時哉がいつ帰国したのか、帰国後どのような職にあったのかなど、

大正六年までの時哉のことはよくわからない。この間、明治四十年三月に栄が鹿児島市新照院町で誕生しているが、姉の幸子と同様に、栄が新照院町で生まれたのは、富が実家である児玉家で出産したためであろう。時哉は単身赴任で県外にいた可能性もあるが、大正四年に栄が『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋脈之図』を模写したことに時哉が関与していたことも十分考えられる。この点については後考を期したい。時哉はその後、大正六年に東京市下谷区茅町に住み、翌年赤坂区新町に転居、晩年の少年保護士事務局嘱託を辞職する願⁽²⁸⁾にも同所が記載されていることから、東京に拠点を置いていたことは明らかである。栄も絵巻を写して間もなく家族で東京に引っ越した可能性が高いと言えよう。

ここで、参考のため、時哉の兄、新納時守について触れておきたい。時守は、安政四年（一八五七）正月一日の生まれ、時哉より七歳年長である。戊辰戦争に従軍、また、西南戦争では薩軍側として熊本に出陣するが、伊佐郡山野で銃傷を負い、病院に入院、まだ戦闘が続いている八月一日に帰順した。明治十七年一月、父時叙の隠居を受けて家督相続。時守は旧派の歌人であり、鹿児島新聞や「鹿児島歌会」では常連の歌詠みで、精華吟社の主催者であったと推測される⁽²⁹⁾。栄が伯父の影響をどれだけ受けたかはわからないが、知的な影響を受けていた可能性は否定できない。

栄の父と伯父についてみてきたが、今度は栄の母親の実家、児玉家について触れておく。先にも述べたように、児玉家は学者の家柄であるが、富の叔父実富（宗之丞実則の弟）は同じ新照院の床次家に養子に入っている。この実富は、新照院に住居する薩摩藩の絵師能勢一清

に狩野派の絵を学び、後に洋画を研究、アメリカのグラント將軍の肖像や西郷隆盛の肖像を描いたことでも知られる床次正精⁽³⁰⁾である。正精の長男が床次竹二郎であり、竹二郎は通信大臣、内務大臣などを歴任した。時哉と竹二郎とはほぼ同年輩であり、交流があったと思われる。

以上のように、栄は、環境もさることながら、父と母のそれぞれから美術的才能を受けて生まれてきたと言っても過言ではなからう。

次に、宇和島の上月氏のその後についてみてみよう。

上月氏は、行敬——行典（小平太）——朝太郎——顕軌と続く。顕軌の次男である晶氏^{（しょうし）}の許に残る資料を調査させていたところ、判物類や宇和島藩の「家中由緒書」の控の類が多く、鹿児島と関わりのあるものとしては、わずかに鹿児島報徳会が大正三年に行典へ贈った長寿を祝う寿詞（賞状の形態を取る）が唯一のものであった。しかし、その後朝太郎が鹿児島新聞社で記者（編集主幹）をしていたことが、晶氏及びその令妹景子氏の証言として得られた。これを糸口として、次のような事実が明らかになった。

上月朝太郎は明治元年二月二十三日に生まれ、昭和十四年十月五日に没している⁽³¹⁾。『農業雑誌』第四百六十一号⁽³²⁾に「南豫牧牛會社の創設」と題する記事を発表しており、その中で「身直接に其會社（南豫牧牛會社——引用者）に従事するを以て」と書いている。また、自身の住所を「伊豫国南宇和郡一本松村」⁽³³⁾としている。つまり、明治二十五年（一八九二）段階では南宇和で牧畜業に従事していたことになる。一方、日露戦争期（明治三十七年～三十八年）には『海南新聞』にいたという田中七三郎（蛙堂）の証言がある⁽³⁴⁾。

鹿兒島では明治後半には鹿兒島新聞と鹿兒島実業新聞が覇を競っていた。朝太郎が記者として勤めていたのは前者であった。鹿兒島新聞社では、明治三十年から「賀状に代ゆ」として毎年元旦に社員の氏名を掲載しているが、明治四十二年に初めて朝太郎の名が現れる。『南日本新聞百年志』³⁶によれば、上月朝太郎は現在も鹿兒島で作り続けられている「薩摩狂句」を発案した記者の一人に数えられている。雅号は「玉兎」。初めて募集を行なったのが明治四十一年六月四日ということである。したがって、明治四十一年中に鹿兒島に赴任していたことになる。同社には宇和島出身で同新聞の基礎を固めたと評される元吉秀三郎がいた³⁶から、朝太郎の鹿兒島新聞社入社は、あるいは同郷の元吉のひきによるものかもしれない。さらに、朝太郎は大正三年一月の桜島大噴火の際、鹿兒島新聞記者が共同で編纂した『大正三年櫻島大爆震記』³⁷の作成にも関与している。なお、元旦の賀状を兼ねた社の広告に朝太郎の名が見られるのは大正十五年が最後である。

以上のように、明治末から大正にかけて、上月朝太郎が鹿兒島新聞の記者として活躍していたことは確実となったが、鹿兒島県立図書館に所蔵されている「鹿兒島新聞」を調査していくと、大正二年六月六日の四面に次のような記事が掲載されているのを見出した(図4)。

△天才児のスケッチ

附属小学校尋常一年の天才児新納榮(八才)が雀の剥製標本を教師の前にて十分間足らずの時間にて寫生したるものなり

として、鳥のデッサンの図版が載っている。記事を書いた記者の署名があるべくもないほどの短いものである。今、この「天才」少年のことを取り上げたのが上月朝太郎であることは証明することはできないが、

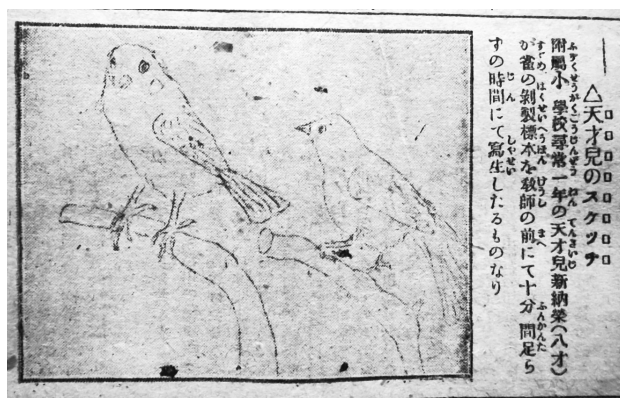


図4 『鹿兒島新聞』大正二年六月六日四面(鹿兒島県立図書館蔵)

可能性としては十分ありうることであろう。また、記者が異なったとしてもこうしたことは記者の間で話題になったはずであり、情報に耳にした朝太郎が自分の家に残されている絵巻の模写を提案した可能性もある。なお、時哉と朝太郎の関係を示す資料は現在のところ見出せていない。

榮がこの絵巻を写した背景について、今少し贅言(仮説)を加えたい。大正四年(一九一五)、前年に始

まった第一次世界大戦に参戦した日本は、ドイツの支配する中国大陸や南洋諸島を占領している。一方国内に目を向けると、明治天皇と昭憲皇太后の崩御に伴う諒闇が明け、新天皇即位の祝賀ムードが全国的に広がっていた。こうした中で新聞の紙面も大きく変化を遂げていく。それまでの漢文調の硬い文体から和文体への変化、大衆受けする軟派の読み物や記事が増加などである。また、ちょうど明治の終わりがら、新年に向けて小中学生の作文、図画、習字の懸賞の募集が始まる。また、天皇の御大典を記念した募集も行われ、このような企画が行われる流れの中で、「天才児」の報道があり、また、上月氏から絵巻

が提供され、その模写も行われたのではなからうか。私立鹿児島教育会附属図書館を引き継いで明治四十五年に設立された鹿児島県立図書館も、初代館長片山信太郎の指揮のもと郷土志料の蒐集に力を入れ始めるころ、絵巻三巻は天皇即位を記念して作成され、新図書館に収められることになったのではないだろうか。

四

今まであえて絵巻の内容に触れてこなかったが、ここで鹿大本と県立図書館本との比較を行いたい。まず鹿大本は上月行敬の自筆本であることを確認する。図5は行敬が万延元年（一八六〇）十二月に上月家の祖先に感謝の意を捧げる祭文の序文の一部である。紙幅の都合で細かな考証

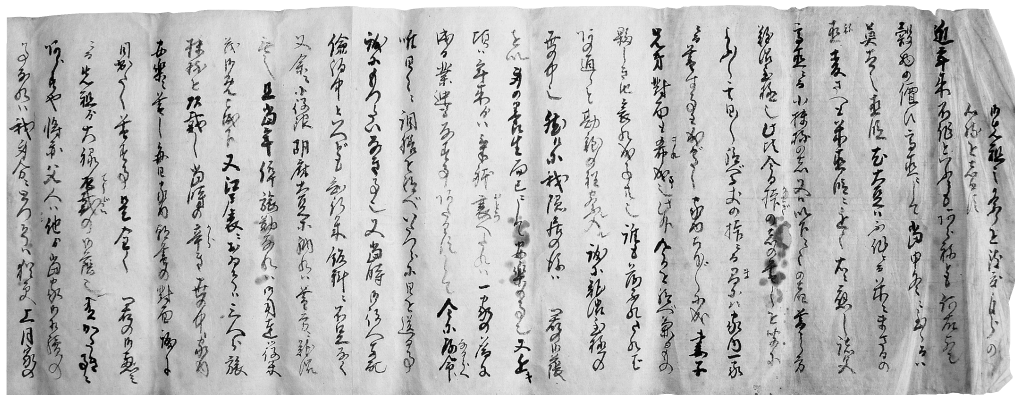


図5 上月行敬作「祭文」の冒頭部分（上月家蔵）

は割愛するが、草書で書かれた文字は、絵巻の文中や跋文の文字などと比べてよく似ている。他にも上月家に残る行敬筆と思われる由緒書や系図とも筆蹟が近似する。

新納栄はこの上月行敬の自筆の絵巻の提供を受けてこれを模写したと見られる。これが県立図書館本ということになるが、現在の鹿大本と県立図書館本とは既に指摘されているように分量に差があるのである。

県立図書館本の第一巻に相当する部分は鹿大本には存在していないが、この他にその構成の上で異なる部分がある。それを図に示したのが次頁の『琉球人行粧之図』の構成比較表である。鹿大本の『行粧之図』の冒頭部分は「薩州惣押／備鎗三十本」として股立ちの姿の侍十三人が描かれ、それに続いて「惣押／御用人」「同／御家老」「御留守居」と続くが、「同（惣押）／御家老」までの部分は県立図書館本では巻末に位置している。そもそも行軍に当たって惣押とは行列全体の最後を言うのであつて、鹿大本の位置は明らかにおかしい。鹿大本は錯簡が生じているようである。接続部分の前後で紙の色合いが異なっていることも見てとれる。平成元年に卷子本に仕立てられた時に正しく繋げられなかったものであろう。

新納栄の模写した絵巻三巻は、原本（鹿児島大学附属図書館本）が不完全であることを考えると、模写の正確性はさて置き、極めて貴重な存在であると言わなくてはならないのである。

『琉球人行粧之図』の構成比較表

《鹿児島県立図書館本》

琉球人行粧巻序
琉球人行列之先／薩州様御形粧／非常を禁め町内 へ棒突兩人出ル
薩州様御駕
騎馬供
薩州様御嫡
供鎗
此跡ハ直に琉球人行列續く／式之巻ニ記す

薩州様御留守居
掌翰使
正使／轎
副使
賛議官
樂正／伊舎堂
正使之使賛
惣挾箱／数凡百餘
同合羽籠／数同様
従是琉球人合羽籠
薩州惣押／備鎗三十本
先々次第に／肩をかへる
惣押／御用人
同御家老
薩州様御側挑灯
同／高挑灯
惣弁當／釣臺
琉球人行粧終
右行粧跡振ひ并幸橋見附之圖
次之巻ニ記す

(注) 書き入れの文字は省略したものがある。

《鹿児島大学附属図書館本》

薩州惣押／備鎗三十本
先々次第に／肩をかへる
惣押／御用人
同／御家老
薩州様御留守居
掌翰使
正使／轎
副使
賛議官
樂正／伊舎堂
正使之使賛
惣挾箱／数凡百餘
同合羽籠／数同様
従是琉球人合羽籠
薩州様御側挑灯
同／高挑灯
惣弁當／釣臺
琉球人行粧終
右行粧跡振ひ并幸橋見附之圖
次之巻ニ記す

五

最後に上月新五兵衛行敬が描いた琉球使節の絵巻にもう一度戻りたい。先に引用した万延元年十二月に作った祭文の前書を見てみよう（句読点を補う）。

近年來不作といふ二もあらねとも何故歟、穀物の價ひ高直ニして、當申冬ニ至り而ハ莫太之直段、尤大豆ハ不作ニ而米ニまざるの直、麦さへも米直段ニ近く、右ニ應し諸色高直ニ而小扶持の者又ハ以下々々の者暮し方難洪至極也。此頃今日持の者の暮しを聞によふく其日く給べる丈の持ニ而、間にハ家内一家ニ而暮す事も成がたく、家内ちりく成、妻子兄弟對面も希成事也。此外今日を給べ兼るもの夥しき由哀れ成事共也。誰も落ふれたればあの通りと勘難の程察シ入ル。誠に難洪至極の世の中也。然ルに我隱居の後ハ君の御蔭を以身の養生而已ニして安樂の事也。又近キ頃ハ年來ハ氣衰へたれハ、一家の為に成る業迎もなす事あたわすして今に存命、唯日々ニ調膳を給べ、いたつらに日を送る事、誠にもつたいなき事也。…（中略）…

当時の辛き世の中ニ家内安樂ニ暮し、毎日家内朝暮の對面誠に目出たく暮す事、是全く君の御恵ミニ而、先祖ハ大禄頂戴の御蔭也。有かたき事ニあらずや。將亦父人ハ他ハ當家御相續の事なれハ、我身分ニとつてハ猶更上月家の御恩身ニ余り難有存也。何卒右の御礼申上度、豺獮すら本ニ報ゆるの禮をなすと聞ば、責て年に壹度なりと時節のものを以魚類取交へ、膳を調へ先祖へ薦之、祭の禮をなし度、尤毎歲盆に先祖を祭るといへとも、家の掟

二而毎年定りたる献立ニ而匱末なる供物なれハ、別に日を撰び祭り度存立、祭文を書す。

行敬は、諸物価が高騰し世上が騒然としている時代にあつて、一家が欠けることなく朝暮の對面ができることは主君と先祖との恵みであり感謝の礼を表したいと言う。家を重んじる姿勢は行敬に一貫するもので、絵巻を描いた心と通じるものがあるように思われる。粟野盛友も同じ心性を以て火消の絵巻を作り子孫に送ったものであろう。勤番で江戸や大坂に出た者が故郷へ手紙を書いてその模様を知らせることは珍しいことではないが、絵巻製作による、宇和島藩士の例（火消しの絵巻は現存が確認できない）は特異な例ではなからうか。新納栄が模写したことで現在その完全な姿を見ることができているわけであるが、鹿大本には欠けている部分には琉球使節を先導する薩摩藩主島津斉興と世子斉彬の姿が描かれている（図6）。薩摩藩内でのこのような行列の絵巻を製作したという例は寡聞にして知らない。上月行敬が薩摩藩と利害関係のない人間であり純粹に個人的な熱情をもって行列に接したからこそ琉球



図6 新納栄写『琉球人行粧之図序』（部分、鹿児島県立図書館蔵）

人行列の全貌を微細に描くことができたという逆説が成り立ったのではなからうか³⁸⁾。その熱意とは、先に述べたように、家や故郷にいる家族への思いだったのである。

注

- (1) 《1》五味克夫「附属図書館の史料（玉里文庫と諸家文書）」（『鹿児島大学学報』第36号、平成三年十一月）
- (2) 《2》『鹿児島大学附属図書館所蔵 玉里文庫等善本図録』（平成九年）
- (3) 《3》『開館10周年記念 琉球使節展』（豊橋市二川宿本陣資料館、平成十三年）
- (4) 《4》亀井森編『玉里文庫善本展—国文学・薩摩・蘭学・近衛家・琉球—』（鹿児島大学附属図書館、平成二十八年）
- (5) 《5》『御國許御家中幼稚の輩 江戸龍土御屋敷前の趣きをも拝見いたさせん』と筆序に又爰に載す（振仮名は省略した）とある。
- (6) 《6》宇和島伊達家の屋敷門は現在江戸東京たてもの園に保存されているが、これは大正期に白金にあった屋敷の表門を移したものである。江戸期の様子を伝えるという意味で『賑之図』は貴重であると言えるだろう。なお、屋敷内の配置については伊達宗城が嘉永五年に三浦義質に作成させた「江戸麻布龍土御屋敷絵図」（『宇和島藩伊達家—収蔵建造物「伊達家の門」の背景—』（財団法人東京都歴史文化財団 江戸東京たてもの園、平成十三年）掲載図版を参照のこと。
- (7) 近代史文庫宇和島研究会編『宇和島藩伊達家史料 四』（近代史文庫宇和島研究会、昭和五十三年）、『同 五』（昭和五十四年）、『同 六』（昭和五十五年）。
- (8) 前掲、『宇和島藩伊達家史料 六』所収「文政元寅四月改分限牒」による。嘉永四年の分限帳も同様の石高。
- (9) 鹿児島県立図書館本の「琉球人行粧之図」の序文の末尾には次のようにある。「……されば此／あらましを書きつゝりかたに写して古郷の児輩に／見せしめんと欲するにいかにもせん予もとより丹青／の道にうとし殊に彼國人の服飾調度の器用／などに至りてハ名をすら知る物稀にして筆□下／すによしなしかあれど兎に角おもひ立ぬる事／たゞにやみなんも本意ならねバ見るに従ひ其大概を／圖し児輩に與へ愛翫せしむ敢□後素の拙きを恥／さるも是一つにハ婦思の旅嚮を慰むるの道なりと云爾／ 嘉永四辛亥年 行敬述」
- (10) 前掲、『宇和島藩伊達家史料 六』所収。
- (11) 宇神幸男『宇和島藩（現代書館、平成二十五年）』。「享保六年 御家中由緒書」（前掲『宇和島藩伊達家史料 四』所収）には、「一 先祖粟野大膳亮二男豊後。秀宗公御守役相勤御知行五百石被下置、従仙臺御供仕罷越候。…」とある。明暦の時点の石高は三百石、嘉永三年の『分限帳』では二百四十五石六十。
- (12) 『明和七年／文政十三年 由緒書』（前掲『宇和島藩伊達家史料 六』所収）。
- (13) 『宇和島藩伊達家史料 八 記録書抜 伊達家御歴代事記 一二（近代史文庫宇和島研究会、昭和五十七年）』
- (14) 宇和島伊達事務所の仙波ひとみ氏のご教示による。宇和島には安永元年は五月三日、安永九年は五月五日、寛政元年は五月二十一日、寛政六年は五月十四日に命令が下ったことを告げる知らせが江戸から届いている。交代は四月中であつた。ただし、寛政元年は「浅草御蔵火之御番之処、増上寺火之番被蒙仰候段申来」とあつて、場所の変更があつたかと思われる。寛政元年を除くと、宇和島藩では八年に一度の割合で浅草御蔵の火の番を担当したことになる。ちなみに岡山大学池田文庫蔵「浅草御蔵火之御番被蒙

仰候諸留」は宝暦十二年の記録であるが、岡山藩が火の番を受けるに当たって幕府の役人、各門の番を担当する武家へきめ細かな挨拶や付け届けがなされたことなど、その詳細がわかる。この史料でも当番の交代は四月である。

- (15) 平成二十三年二月発行。鹿児島市立美術館の山西健夫副館長のご教示による。

- (16) 引用に際し、一部、アラビア数字を漢数字に、横書きを縦書きに直す、和暦を補うなど変更を加えた。

- (17) 新納桂氏蔵の系図の写しによる。同族の新納氏と思われるが詳細は未考。先述の新納桂氏の許にある系図の写しの記事に基きながら、新たに判明した事実（＊を付す）を加えて示す。

- (19) 『見玉宗之丞日記』明治二十六年五月六日条。同書の引用は所崎平編『見玉宗之丞日記——明治の生活がよくわかる——下巻』（所崎平発行、平成二十四年刊）による。

- (20) 『官報』第二千九百九十八号（明治二十六年六月二十八日）による。時哉は明治二十五年文部省令第十九号によって「認定」により免許状を授与された。文部省令第十三号第五条、第六条の規定により、高等師範学校および女子高等師範学校卒業生は、甲種とされ認定（無試験）で第一次の検定を受ける。『見玉宗之丞日記』明治二十六年七月一日条によれば、富から宗之丞に連絡があった。

- (21) 『職員録 乙』（印刷局、明治三十五年）による。

- (22) 山本経天「近代中国における中等教員養成史研究」（神戸大学 博士論文、平成十六年三月）付表1「清朝末期在華日本人師範教習一覧表」による。

- (23) 国立公文書館所蔵「任免裁可書」（任B01412100）

- (24) 『官報』第四百八号（昭和三年五月十日）

- (25) 前掲、所崎編著（注19）。

- (26) 同右。

- (27) 前掲、山本論文（注22）。

- (28) （注23）に同じ。

- (29) 『鹿児島新聞』大正二年二月二十六日の一面「○精華吟社十一月分選歌新納時守氏点」とある。

- (30) 天保十三年（一八四二）生まれの正精は、明治三十年（一八九七）に五十六歳で没しており、新納栄と直接の影響関係はない。正精の履歴については永田雄次郎・山西健夫『薩摩の絵師たち』（春苑堂出版、平成十一年）参照のこと。

- (31) 上月家文書による。

- (32) 明治二十五年十月、学農社。

- (33) 一本松村は南宇和郡の東部に位置し、明治二十二年の六村合併で成立、昭和三十七年一本松町、平成十六年に南宇和郡五か町村と合併して愛南町となっている。

- (34) 『愛媛新聞百二十年史』（愛媛新聞社、平成八年）。「永田氏は英語が堪能で、その部下に宇和島の人上月朝太郎というのがあり、編集の暇々に永田氏から英語をよく教えてもらったことを覚えていいる」とある。

- (35) 『南日本新聞百年志』（南日本新聞社、昭和五十六年）。

- (36) 同右。

- (37) 大正三年四月十三日、櫻島大爆震記編纂事務所刊。編纂を担当した記者の集合写真の中に朝太郎も写っている。キャプションには「上月朗山」とある。

- (38) 上月行敬が具体的にどのような方法で絵巻を完成させたのか——例えば、写生に基くものか粉本のようなものが存在するのかなど——については、今後検討していく必要がある。

〔付記〕

調査ならびに図版掲載の許可をいただいた鹿児島県立図書館、鹿児島大学附属図書館に御礼を申し上げる。また、本稿を成すに当たっては次の方々のご協力を仰いだ。ここに厚く御礼申し上げる次第である。

上月晶、上月一香、上月聖彦、新納桂、新納瑞穂、渡邊晃、二宮信彦、仙波ひとみ、岡井健司、富士ゼロックス株式会社、宇和島市立図書館、五味克夫、山

西健夫、友野春久、杉本和寛、内山弘、佐藤宏之、多田蔵人、森園壽、堀口裕著、鶴丸博文、山口まゆみ

本稿は、JSPS科学研究費補助金・基盤研究(B)(一般)「鹿児島県の歴史資料ネットワークの実践と展開」(16H03475)の成果の一部である。

中野三敏先生
金寿記念文集
雅俗小徑

平成27年12月刊

◇序

◇研究余滴篇

解題「真多念之夢」

荷風絵葉書の表と裏

述斎偶筆の原型

『物識天狗』と『物知り天狗』

清涼井蘇來の著作について(補遺)

『雅俗文庫』の文晁画本

若き日の頼山陽―石川彦岳の紀行より―

鈴木蘭園著『雷琴記』のこと

『唐詩選画本』成立の背景

雅俗文庫蔵・実録『荒川武勇伝』覚え書き

『直養漫筆』断章

定雅の画賛―笠の銘―

『源語梯』覚書

◇懐旧雑記篇

中野先生と和本修業

時代の先をゆく中野先生

赤いセーターとデジャヴ

九重へ

指南車に導かれて

先生の蔵書について

鶴を見る旅

先生と私

二十年来の励み

中野三敏先生と賀茂季鷹旧蔵書

厳しくも優しい先生、失礼な弟子

三度のアドバイス

◇あとがき

宮崎修多

板垣耀子

ロバートキャンベル

宮崎修多

安永美恵

桒澤葉子

高杉志緒

川平敏文

中尾友香梨

大庭卓也

菊池庸介

亀井森

田邊菜穂子

天野聡一

白石良夫

飯倉洋一

園田豊

進藤康子

久保田啓彦

高橋昌治

丹羽謙治

中村謙恵

盛田帝子

康田志賢

勝又志基

川平敏文

※一冊九〇〇円(送料込み)にて販売しております。お申し込みは雅俗の会事務局まで(奥付連絡先参照)。